インタビュー

倉橋惣三先生の教えを受けた保育者

大滝雅子（おおたきまさこ）さん

昭和12年東京女子高等師範学校保育実習科卒。卒業後、現在の天皇陛下のご幼少時代の側近奉仕（皇后宮職出仕　東宮仮御所詰）を5年間にわたり務めた。お母様である大滝州代（くにょ）さんもまた東京女子高等師範附属幼稚園に勤めた経歴を持つ方であり、この稿を書くにあたり、お母様の自伝『幾山河』と、雅子さんご自身の自伝『新幾山河』（共に佼成出版会）を参考にした。

東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学。以下「女高師」と略す）昭和十二年卒（ちょうど女高師創立六十周年の年に在学）で、倉橋惣三先生の授業を受けた方がいらっしゃるということを知り、早速私たち二人は、静岡市にあるその方のお宅に伺いました。

現在とは違って、女性が学ぶことが一般的でなかった昭和の初期に学ばれた大滝雅子さん（現在九十四歳）のお話は、女高師での授業や同窓生に触れたり、尊敬されるお母様などご家族の話になったり、天皇陛下の幼少時代の側近としてのお務めの話になったり、戦争後のご苦労のお話になったりと尽きることがなく、私たちは時のたつのも忘れて、三時間余りにわたる長い時間、聞き入ってしまいました。

ここにその一部を紹介したいと思います。

聞き手　永倉みゆき（常葉大学短期大学部）
山下紗織（静岡福祉大学）

母が女高師を受験したころ

大滝　母はね、(女高師の)大正の卒業生なんだけれど、文科を出てるの。姉は文科の地歴です。妹は、保育実習科。私が、保育実習科があんまりいいところだったと言ったら医者の希望をやめて入ったの。父は、東京高等師範を出て、戦争中の初期には沖縄県の男子師範学校長として、今でいうと学長っていうような仕事もしたんです。

永倉　教育一家だったんですね。

大滝　母は山形県生まれで、昔は小学校の代用教員っていうのがあって、四年生を受け持ってお給料を七円もらっていたけど、どうしてもそれで物足りなくて、それでお茶の水の試験を受けたの。親戚をはじめみんな周りの人がね、七円も給料をもらってたのに、五円も月謝を出して行くなんていうのはね、山形言葉で「いだますちゃ、いだますちゃ(残念だ、の意味)」って。みんな惜しい惜しいって言ってね、もうお悔やみみたいに……。

それでも母は女高師を卒業して、山形の鶴岡の女学校の先生になるってことで、校長先生が来て決めて帰った後で、お茶の水に残るように言われたんです。それが、附属幼稚園でした。

永倉　お母様は文科でいらしたのに……。

大滝　文科を出たのに、倉橋先生の前の安井哲子先生(後に新渡戸稲造と共に東京女子大学の創設にかかわり、二代目学長に就任した)が、ちょうど園長だったんですが、その先生のもとで幼児教育を学ぶことが一番大事だから、山形県に行くなって言われた。それでまたね、山形の人からは、そんな五円も出して女学校の先生になるって行ったのに、幼稚園の先生になるだなんて、また「いだますちゃ、いだますちゃ」って。

永倉　いたましや、いたましやって。

大滝　ふふふふ、とってもね、残念がったんだって。で、五年お勤めしたんです。お茶の水の幼稚園にね。それで五年したところでね、学習院(学習院女学部)からね、どうしても一人来てもらいたいってことで学習院の教授になって行きました。

永倉　お母様から幼稚園の時のお勤めの話をお聞きになったことがありますか。

大滝　ええ、園長先生の安井哲子さんは、何か頼む時にはね、先に「ありがとう」っておっしゃるような方で、自然にみんな尊敬していて……。

永倉　立派な方だったんですね。

大滝　そうですね、人格者だったんですよね。そのころはまだ皆さん、着物を着たりしていたようですよ。「毎朝遊戯室で全園児集って楽しい会集。会集が終わると各の保育室に帰って、その日の保育案に従って、童話や手技、唱歌や遊戯などをする。それがすむと、いよいよ自由遊び、子供は嬉しげに勢いよく外に飛び出す。庭にはブランコ、メリーゴーランド、すべり台、砂場などが、明るい日差しの下に子供の来るのを待ちかまえている。かけっこ、かくれんぼ、陣取り、かごめ等嬉々として遊ぶあの声、あの顔、庭のすみの小高い築山を上がったり、駆け下りたり。私もその中に混って駆けまわる。花壇の草取りもする。ばらの油虫退治もする。子供は喜んで手伝ってくれる。こうして子供と親しく接する間に、自然と子供の遊びが育ち、生活が育つ。」（『幾山河』より）

大滝　母がね、学習院を辞めた時に、うちでピアノを買ってくれて、姉妹三人で習い始めたわけ。妹が一番小さい時からなので上手になったけど、私もピアノで音楽学校に行きたかったの。そしたらね、体調を崩して、ピアノ科は健康でないととても無理だって言われてね、それで私は考えて、姉と同じ女高師の、理科を受けたの……。

永倉　そうだったんですか。

大滝　（茨城の）下館の女学校の一番二番三番のまあまあ成績がいい人で受けたのに、みんな外れちゃって。そしたら、母と家のばあやがね、私はね、音楽が好きで絵を描くのが好きで子どもが好きだから、こういう科（保育実習科）があるってことを言ってくれて。三月に保育実習科の試験を受けたんです。

永倉　あー、時期が違っていたわけですね。

大滝　それでね、理科の試験がそこに入っていて。その年が動植物、次の年が化学と物理だったのね。だから私の年は動植物だったんです。で、動植物を一生懸命にまあ勉強して。それから写生があったの。それとね、戸倉先生の……。

永倉　ああ、戸倉ハルさん……実技もあったってこと

ですか。

大滝　ええ、実技ね。ちょうどあの体育館の床を斜めにスキップを二回。そのほかにも手や指の運動が、まあいろいろあってね。それで一日目に受かったのが次の日に貼り出されるわけ。

永倉　そうなんですか。厳しいですね。

大滝　だからね、一日目で落ちたらもう二日目は受けられないの。で、二日目の音楽の試験はね、新しい楽譜があって、最初の音をピアノでポンて弾いて、その楽譜で歌って最後の音が合わないとダメ。とっても大変で……、二十四人しかとらないでしょ。受験生は二百人ぐらいいたんですが、入学したのは、お茶の水の附属から四人、桜蔭から二人、あとほとんどは東京の府立からで、地方の人はわずか九人だったわけです。

保育実習科の授業風景

永倉　授業の中で印象深かった講義はありますか。

大滝　下田次郎先生の修身ね。それから古川竹治先生は心理学。堀七蔵先生が理科。それから倉橋惣三先生に、あの、幼稚園の主事として、教育学と保育と。戸倉ハル先生は体育。山形寛先生が絵画、手工ですね。中村先生と平井信義先生が育児。それから木村先生が木工。音楽は中村先生、大岩先生が園芸……。戸倉先生のお遊戯ではね、私が必ず絵を描いたりして記録したら褒めていただいたの。「皆さん、これを見たらよくわかります。参考にしなさい」なんて戸倉先生が言ってくださったことがありました。ほかにも園芸ではお花畑をつくったり、木工では、金づちで打ったりかんなをかけたり、そういうのも習って忙しかったけど、みんなね、とても明るいクラスだったからどの授業も楽しかったです。

永倉　授業の中で、幼稚園に保育をどのくらい見に行かれたんですか。

大滝　そうね、一週間に三、四回くらいでした。一日の半分は授業で、午後からとか。一日行くっていうのは、週一回くらいだったわね。それを一年間。

山下　それは、実際に子どもたちとかかわるっていうことですよね。見ているだけではなくて。

大滝　子どもと一緒にお弁当を頂いたり外で遊んだり。お絵かきや粘土、お遊戯もやりました。本当に大変だ

ったけど、見よう見まねでやりました。子どもたちから教えられることもいっぱいありました。

永倉　附属幼稚園にはどんな先生方がいらっしゃいましたか。

大滝　私の時、園長先生は倉橋先生でその次は及川先生と菊池先生、そして新庄先生、大岡、小島、清水、坂本、杉山先生もおられて、学生が森、川、林、山、海、池の六組に分かれて行った時、その先生の下でご指導をいただくんです。

永倉　困ったことってありますか。

大滝　一人じゃ心細いけど、クラスに四人ずつだったので、積極的な人がいるとそのまねをするし、お互いに磨き合いながら自然に身につくのね。

永倉　附属幼稚園の先生方は、どんな格好で保育されていたんですか。及川先生たちは。

大滝　袴をはいていらしたわね。私たちや子どもたちは洋服でね。倉橋先生は自由保育を大切にしていたから、附属幼稚園では園服無しでした。今でもそうじゃないかしら。子どもに同じおそろいの園服で、同じ帽子でっていうんじゃなくて、全部自由に色とりどりにって。自然の色っていうものに対しても興味を持てるように。エプロンも決まってなくていろんな形でした。

永倉　倉橋先生の授業で印象に残っていることはありますか。

大滝　何しろとっても楽しくてね。ユーモアがあってもその中に大事なことがピッて入ってるの。ただ笑ってたんじゃだめでね、その中の大事なエキスをね、パッとつかまないとだめ。とっても素晴らしい授業でした。若者は未来に生きるし、歳の人は過去に生きるけれど、子どもは現在に生きるから、その毎日の、その時その場が大事だってことは、いつでもおっしゃったわね。それこそ、走ってきて……飛んできて、その時に受けられる気持ちが……今は忙しいから後から、じゃあだめだって。さっきは失礼、なんて言ったって子どもはね、その時に何の事だかわからない。走って飛んできてぶつかった、その時が大事だって、現在に生きるのが大切と、よくおっしゃったわね。

永倉　当時の幼稚園の中にも、難しいことを教えるような感じの保育もあったんですか。

大滝　ありましたね。歌なんかが高度な音域のものも

ありました。その点、戸倉先生は、音域が子どもにちょうどいいような、それで詩も短くて簡単な歌が割と多かったですよね、お茶の水の講習で夏にやるようなね。ほかの所は相当難しいような歌をやっていたように思いますよ。

永倉　そういう意味では、子どもに即した保育を実践されていたっていうことですか。

大滝　そう。何しろ倉橋先生の自由保育っていうのは、その自由っていうのを履き違えるような、いかにも放っておけばいいようなふうに思う人もあったようだけれど……。（保育の中で）字を書かせたりいろいろする所があるんですよね、そういうのがいい幼稚園のように言われたりするけれど、やっぱり、自然に、だんだん聞いてきた時に教えてあげるっていうような、自然に芽を伸ばしてあげることが大事ですよね。絵でも何でも、描き方を教えるっていうのじゃなしにね。

山下　倉橋先生の話なんですが、「保育者っていうのはこうあるべき」っていうのは、あまりおっしゃらない先生だったんでしょうか。

大滝　そうねえ……こうあるべきっていうようなことはあまりおっしゃらないで、ありのままの、自然の純真な気持ちでってことは、いつでもおっしゃった。でも、心掛けるっていうか、心配りとか気配りとかね、そういうようなことを身につけるってことは大事ってことはおっしゃったわね。ただぼんやりしているんじゃなくて、いつでもその時その時に対応のできる人でありたいってことはおっしゃいました。それでね、倉橋先生から、私共のクラスは整理整頓が悪いって教えていただきました。

永倉　どういうことですか。

大滝　やっぱり、子どもに接するような人は、いつでもきちんとね、周りを片付けておくってことが大事だってことをおっしゃったんですね。「今度のクラスの人は、整理整頓とかね、立ち居振る舞い等が欠けている」って言われて。それは後に考えてみると貴重なお言葉でした。

〝青天の霹靂〟の出来事

「昭和十二年一月末、附属幼稚園主事の倉橋教授から『重大なことがあるから、両親のどちらかが来るように』との電話があった。……倉橋教授からの意外なお言葉は『数え年五歳になられた皇太子殿下（今上陛下）が、両陛下の下を離れ、お一人で赤坂の東宮仮御所にお移りと決まり、側近奉仕の大役を諏訪、大滝の二名がお務めするよう下村壽一校長の推薦により内定し、この上もない光栄のことです。……』」（『新幾山河』より）

大滝　母が教授から説明を伺った後で、「娘には行儀作法も、言葉遣いも何もしつけていないから、今から三月までお作法を習わせるのはいかがでしょうか」って倉橋先生に伺うと、声を強められて、「言葉遣いの立派なお嬢さんは上流社会を探せばいくらでもある。子どもっぽく、元気のよく、素朴でありのままのところが取りえであなたの娘さんが選ばれたわけで、今の御所では、何よりも本気になって夢中で皇太子様と駆けっこやかくれんぼを楽しめる、童心豊かな元気のよいことが大事だ」ってその本質をおっしゃったわけで。「行儀なんか習わせる必要ない」って目を三角にしておっしゃったって母は言っていました……。

御所には倉橋先生もいらして、女官長さんや侍従さんたちにも講義をなさった。私も諏訪さんと一緒に聞きました。倉橋先生は本当に、いつも明るくて温かいお父さんのような方だったように思いました。大黒柱っていうのかしら、大船に乗ったような気持ちでした。

授業の時に、積み木や何かは大きいのが大事だって話があったでしょう。だから御所に行ってから、二人で、積み木はちっちゃいのじゃなくて大きいのをって言って、御所では大きいのを買ってくださったのよ。お遊戯室三分の一になるくらいの大型積み木を。二人で一緒なので心強く、学校で習ったことは一生懸命にやらせていただきました。

永倉　倉橋先生が、何か教育の上で気をつけるようにと言われたことはありましたか。

大滝　倉橋先生は、形について、寄り添うとかっていうよりも、精いっぱい、思い切りありのままでね、正直にお仕えすることが大事だっておっしゃった。背伸びするんじゃなくて、ありのままでお仕えすることで

すよね。鬼ごっこだったら、加減するんじゃなくて、自分が精いっぱいその鬼ごっこを……かくれんぼするのでも、自分がもうほんとに子どもになりきってする、そのことが大事だってことをずっとおっしゃったのよね。

永倉　当時の皇太子殿下に何年お仕えしていたんですか。

大滝　五年間です。殿下は十二月生まれだから、最初三歳四か月で、まだ片言交じりだったのね。それから三年間の御所での幼稚園生活を経て、初等科の二年生になられる時までです。学校にご入学の時はうれしかったですよね。学校からお帰りになると、夕方からはお遊びの相手をしました、一年生の終わりだったのかしら、代表で賞状を頂く練習があったり、ご本をお読みになるのを伺ったり。今でもそのお声が聞こえてくるような気がします。

それから、殿下は童話がお好きだったのでね、よく即興で動物が出てくるお話をつくってほしいとご注文され、いろいろお話をしました。ある時は、クマノミとキリンとウサギが出てくるお話っておっしゃってね……。その時、私には「くまみ」って聞こえたのでね、クマだろうと思って、「丘の上からキリンがポコポコ下りてくるとその後ろからくまみがのそのそ歩いて来ました」って言ったら、殿下がね、「もう一度そのお話、初めからして。だってクマノミは海に住んでいるのにね、山から歩いてきたらかわいそう」っておっしゃり、すぐに詳しくクマノミのことを教えてくださったので、私が初めからやり直したら拍手をされたなんてことがありました。……お優しく明るくて、人の気持ちを察する思いやりがあられ、本当に殿下から学ばせていただいたことはたくさんありました。

（この後さらにたくさんのお話を伺いましたが、今回は紙面の都合上、割愛させていただきます。）

永倉・山下　貴重なお話をありがとうございました。

（二〇一三年十月二十七日）

＊P71「ひろば」欄もどうぞ併せてお読みください。（編集部）